
クリスマス・プレゼント

兵衛婚・怜汰須

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマス・プレゼント

【Nコード】

N3346M

【作者名】

兵衛婚・怜汰須

【あらすじ】

クリスマスを目前に控えた冬の日々の物語。

身体に重い病を抱えた幼なじみの少女にクリスマスプレゼントを買いおうと計画している主人公。

少女は、クリスマスの直前に命のかかった大手術を控えていた……。

第一章 冬のある日（前書き）

結構ベタな展開です。

まあ、まずは読んでみてくださいな。○（○）

暇な時間でちょいちょい読めるように比較的細かく区切る事にしました。

第一章 冬のある日

…季節は冬。

雪こそ降らないものの、木枯らしの執拗な立ち退き命令に木々の葉が完全に屈してしまった頃。

信司は5年もののママチャリにまたがり、軽快に海岸沿いの道を飛ばしていた。

「随分、遅れちまったなあ…」

左腕に巻いた時計を覗き込み、信司は呟いた。

信司はさきほどまで、今自転車で走っている道を少し戻った所にある商店街のショーウィンドウに心奪われていたのだ。

今年もあと数日で、人々が心を弾ませる聖なる夜…クリスマスがやってくる。

今やどこもかしこもクリスマススムードが充満していて、商店街でもプレゼントを買う客を獲得しようと、店という店が各々熾烈なクリスマス商戦を展開中。

そんな中商店街のショーウィンドウに陳列された商品を物色していた信司は、夢中になるあまり友人との約束の時間に遅れてしまったのだ。

「怒ってねえかなーアイツ…」

一人呟きながらペダルを漕ぎ続けていると、段々と目的の建物が見えてきた。

この辺りで唯一都市と呼ばれる地区からはかなり離れた、お世辞にもアクセスが良いとは言えない七階建ての建物。

「よつと」

キキッと自転車を駐輪場に止め、信司はその建物の中に入ろうとし、立ち止まった。

「おつと危ない危ない…」

信司はポケットから携帯電話を取り出すと、ボタンを長押しして電源を切ってから中に入った。

この建物…この辺で一番大きい総合病院の中では、携帯電話はご法度だ。

第一章 冬のある日（後書き）

やっぱりこのくらいに区切ると読みやすいですね（
感想お願いします）（

第二話 少女の病

「よっ。奈々」

信司は元気よくガラッと引き戸を開けると、個室の主の名を呼んだ。
しかし、返事がない。

信司は個室の中に入り中を見回した。が、いない。

「……奈々？」

どうしたんだ？信司はいぶかしんだ。

が、次の瞬間

「しんじいつ！」

背後に響いた声に驚いて振り返った刹那、信司の額に何やら緑色の物体が迫り…

スパコーンッ

乾いた音とともに直撃した。

「いってえ！」

「いってえじゃないっ」

「……やっぱり奈々か。こんなガキ臭い事しやがって…」

信司は頭を押さえながら目の前で病院のスリッパを握っている女の子を睨んだ。

向こうは向こうで柔和な顔に小さな皺を寄せてプンスカしている。

おそらく彼女の背後で半開きになっているクローゼットの中にも隠れていたのだろう。

「だって信司がいつもの時間になっても来ないんだもん。…心配したんだよ？」

そう言つて奈々は頬を膨らませた。

「ごめん。途中で腹が痛くなっちゃって」

信司は嘘をついた。

プレゼントはサプライズで渡さなければつまらないと考えての事だ。かといって咄嗟に上手い言い訳が思いつかず、イタズラがばれた子供レベルの嘘しかつけない所が何とも隠し事の苦手な信司らしい。

「ふーん。なんか嘘くさいけど…まあいいや。引っぱたいてすつきりしたから許してあげるっ」

ようやく奈々はいつもの和やかな表情に戻った。

「じゃあほら、無理してないで寝てなつて」

信司は、白い鉄柵に囲まれたベッドを指差した。

「無理なんかしてないもん。立ってる方が楽なんだよ」

「いいから。大事な時期に何かあったらどうするんだよ」

「もう、しょうがないなあ」

そう言つと奈々は、よいしょとベッドの上に乗り、横たわった。

信司は奈々の肩まですっぽりと布団を被せてやった。

「……ありがとう」

奈々は布団の端に顎を埋め、恥ずかしそうに礼を言った。

「……どういたしまして」

……

二人の間に微妙な空気が流れる。

「……もうすぐだな」

信司は沈黙をやぶって言った。

「……うん」

浮かない顔で奈々が答えた。

もうすぐ、奈々の運命を決める大切な日がやってくる。

幼い頃から、命にかかわる難病と闘って来た奈々。

その完治を目的とする高度な手術が、ついに奈々の身体へ施されるのだ。

年齢が幼く、体力がないから無理だという理由で、長い間手術を受けられなかった奈々。

高校生になってやっと手術可能と判断された彼女は、手術の日が来るのをずっと待ち望んでいたに違いない。

でも…

奈々の顔を見ると、どうも手放しに喜べない様子。

まあそれもそうだろうと信司は思った。

「やっぱり、不安…だよな」

不安でないはずもない。

しかし、こんな事を言ってどうするといふのか。

「……………」

奈々は答えない。

「……………」

信司は今さらながら不用意な発言を後悔した。

「不安」とか「怖い」なんていう発言は、一番不安で怖がっている本人の前では許されない。

「……………」

また気まずい沈黙。

信司は黙りこんでしまった奈々を元気づける言葉を見つける事ができなかった。

きっと自分自身不安に思ってるから言葉が出ないのだ、と信司は自覚していた。

『やっぱり、不安…だよな』ではなく信司自身が不安なのだ。

「信司……………」

今度は、奈々から口を開いた。

「…学校、楽しい？」

「奈々……………」

信司は驚いた。

普通の奈々は、滅多に学校の事など話題にしない。

信司も、入退院を繰り返す生活のせいでろくに学校へ通えていない奈々を氣遣って学校の話はなるべく出さないようにしていた。

「……………楽しいよ」

嘘をついても仕方がない。でも…

「お前がいないから寂しいけどな」

これだって、決して嘘ではない。

「……………そうだよね」

奈々は上体を起こし、病室の窓から外を眺めた。

窓の外には、都会とは趣を異にした郊外の美しい風景が広がっている。

少し右手に視線をずらせば海が見えそうだ。

…この風景を見る事はできても、実際に行くことは滅多にかなわない奈々。

病気のせいで、今までどれほどつらい思いをしたことだろう。

「……………手術が成功すれば、私も学校に行けるんだよね」

「……そうだな」

「友達も作れるし、遠くへお買い物にも行けるんだよね」

「……うん」

すると突然、奈々が身体の向きを変え、手を伸ばして信司のシャツを掴んだ。

「おい……」

「……不安だよ。……怖いにきまってんじゃない」

しゃくりあげるような声は、かすかに震えている。

「でも、やっとチャンスが来たんだよ？……信じるしかないじゃん」

「奈々……」

「もう……病気のせいでやりたい事もできないなんて、いやだよ……」

信司は、自分の鈍さを呪った。

気丈な奈々は、時として周りの人間にその強さを誤認させてしまう事があるのだ。

「じゅめん……」

信司はただ、震える奈々の手を握ってやる事しかできなかった。

静寂に包まれた病室に、断続的な嗚咽が響き続けた。

第三話 奈々の父

「すみません。差し出がましく色々聞いちゃって」

「差し出がましいなんて、とんでもない。…奈々の事を気遣ってくれてありがとう」

病院を出ようとした所、信司はロビーで奈々の父親に出くわした。

奈々との付き合いが長い信司は、その家族とも交流を持っている。

今日は、手術の最終的な手続きをしに病院へ来たらしい。

事前に担当医からの説明も受けたと言う父親から、信司はその内容を教えてもらっていた。

「要するに、このまま順調に手術の日を迎えられればほぼ確実に成功させられるそうだよ」

奈々の父は、穏やかな人柄を思わせるゆったりとした優しい口調で言った。

「良かったです」

「ただ」

彼は少し迷ってから、言いにくそうに続けた。

「奈々の病気は非常に病状の波が激しくて、当日どんなコンディシ

ヨンになっているのかはまったく予測がつかないそうなんだ」

それは知っている。

今日みたいに元気に動き回っている日もあるが、過去には高熱を出してベッドから起き上がれなくなった事もあるし、血を吐いて病院の廊下で倒れた事もあるのだ。

「手術の特性上かなり大がかりな準備をしなければならぬ上、とても長い時間手術室を占領する事になってしまうから今回の予定日を逃せば次にチャンスが来るのはいつになるか保障できかねるとも言われたよ」

『体調が悪いから三日延ばして下さい』とかは通用しないという事だろう。

「これから手術までの数日間、健康管理には十分気を配らなければならぬ」という事ですな」

「うん」

彼はうなずいた。

信司は時計を確認した。

ロビーの壁に設置されたアナログ時計は、そろそろ帰らなければならぬ時間だと告げていた。

「じゃあ、僕今日はこのへんで」

「ちょっと待って」

立ち去ろうとした信司を、彼が呼びとめた。

「……………」

「信司君は知っているとと思うが、奈々…あいつはうわべこそ元気に振る舞っているものの、本当はひどくさびしがりで、気弱なやつだ」

語る声には、他の何でもない、娘を想う父の気持ちがこもっていた。

「それに加えて身体があんなだから、中学・高校と友達らしい友達も作れていないようだし、精神的に信司君に助けられている所がかなり大きいと思うんだ。……本当にありがとう」

「そんなことはありませんよ」

信司は否定した。

「僕は奈々の事なんて何もわかってやれてないし、寧ろ傷付けてるんじゃないかって思うことばかりです。…今日も、ちょっと泣かせてしまいました。すみません」

信司は奈々の言葉を思い出した。

『もう…病気のせいでやりたい事もできないなんて、いやだよ……』

奈々の精神状態、ひいては体調の事を考えるなら、きっと自分は力強く彼女を元気づけるべきだったのだろう。

「…信司君が今日奈々に会いに来てくれなかったら、あいつはきっと泣くのすら我慢してたんじゃないかな」

「……」

「あいつは信司君に心を許してるんだよ。だから君の前では素の自分を晒して、甘えているんだ」

「甘えている？…奈々がですか？」

「人間にはね、泣きたいときもあるし愚痴を言いたいときもある」

彼は、人生の厚みを感じさせる遠い目で語りを続けた。

「景気よく励ましてくれる人だけでなく、不安や焦りを共有してくれる人も必要だったりするしね。…そしてそういう人には誰もがなれるわけじゃないと思うんだ。実際最近の奈々は私にはなかなか本音を言ってくれない気がするよ」

彼の声は少しさびしそうな響きを含んだ。

「…まあ、というわけで私個人の見解として、奈々には信司君が必要だと思うわけだよ。…ところで、将来君はあれを貰ってくれる気があるかい？」

重く沈んだ空気を一掃しようとしたのか、奈々の父は唐突に聞いた。

「え……」

「父親の私が言うのもなんだが奈々はなかなかいいし、身体は弱い料理はできるんだ」

奈々が、結婚……

当然に来るはずの未来。

それなのに、どうしても信司は、それを現実の話としてとらえる事ができない。

どうして、こんなにも自分はマイナス思考ばかりしているのだろう。自分よりずっと心配なはずの奈々の父でさえ、来るべき未来を信じているというのに。

「ま、まあ、娘の婚活はまた今度にしましょうよ。…もう夜も遅くなりましたし」

彼は笑った。そして、引きとめてすまなかったねと言った。

信司は丁寧に挨拶をし、その場を去った。

病院を出て自転車にまたがると、信司は後ろを振り返らず、ただがむしゃらにペダルをこいだ。

………何やってんだ俺は？

自分が心底嫌になった。

明るくいられると思っていた。少なくとも奈々と手術の話をするま

では。

こんな時こそ、自分が強くあらねばならないのに。

自分自身の、「奈々を失うかもしれない」という恐怖が、どうしても先に立ってしまう。

「奈々を不安がらせに来たんじゃねえだろうがっ……！」

なぜ、「大丈夫だ」と言えなかった？

俺の不安を奈々に移してどうする？

悶々と考えながら信司はペダルをガチャガチャと回し続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3346m/>

クリスマス・プレゼント

2010年10月10日21時00分発行